

シベリア抑留記

愛媛県 坂本 蔦男

出生から入隊まで

大正十一年二月十一日西宇和郡宮内村（現保内町）に農家の二男として生まれ、宮内高等小学校を卒業。

暫く家事に従事後、宮内村役場（農会）に就職して食糧増産、供出の業務に従事した。この間、愛媛県農村中堅青年研修所の研修を終了。昭和十七年徴兵検査に甲種合格。

昭和十八年一月十日現役兵として徳島西部三三部隊に入隊。約三カ月初年兵教育を受けた。

転属

北滿に駐屯する郷土部隊、歩兵四十三連隊第二中隊に転属のため、三月末歓呼の声に送られて桜花爛漫の徳島を出発。下関港、釜山を経て、数日後の四月四日、積雪で銀世界の虎林に到着した。以来、郷土の先

輩の指導と激励を受けながら一期の検閲を終わり、下士候を志願、延吉の関東軍第二下士官候補隊の教育を終えて昭和十九年十二月伍長に任官、目前のソ連と対峙して猛訓練に励んでいた。

その頃の戦局は、各戦線共に一進一退、各地に玉砕が相次ぎ、南方戦線強化に在滿部隊が統々と転用された。わが連隊からも十九年二月、第三大隊が大宮島（グアム島）守備に派遣されて、同七月、激戦の上全員玉砕した。

昭和二十年を迎え、手薄になっていたソ満国境強化のため、逐次新設兵团が編成された。私は同三月、第一二四師団歩兵二六六連隊第三大隊本部要員としてムーリンへ転属した。

ソ連軍侵攻前後

歩兵二六六連隊は、虎頭にいた第四国境守備隊を基幹として、第十一師団の歩兵ほか各連隊からの転属者で編成され、歩兵連隊とはいえ重火器は皆無という軽装備の部隊であった。編成完結間もなく、部隊はムーリンを後に牡丹江の遙か後方、地名は忘却したが、わ

が部隊の最後の決戦場と言っていた曷城山周辺において野戦陣地の構築を始めていた。私は、ムーリンから石頭に移動した留守隊との連絡係として本隊と留守の連絡に当たっていた。石頭の留守隊に滞在していた八月九日未明、非常呼集のラッパが鳴り響いたと同時に、近く遠くの轟音と共に地響きがしてブラック兵舎がめきめきとゆれた。ソ連軍の侵攻が伝えられ、臨戦態勢がとられた。留守隊の大部分は直ちに曷城山の本隊に向かって出動したが、私以下三十七人は残留を命ぜられて、まず石頭駅に集積されている軍需物資（衣類、食糧等）を焼却処理せよとの命を受け、油、手榴弾、爆雷を受領して他隊の兵とともに必死で爆破焼却に当たったが、完全梱包の物資を爆破焼却することは至難の業であった。

やがて石頭駅も危険状態となり、別命を受けて石頭の東方山岳を国境方面に向かって前進して、八月十三日頃と思う、某砲兵部隊に合流して弾薬資材の運搬に当たっていた。眼下に猛進する敵戦車、これを迎え撃つ砲兵隊のすさまじい砲撃音はまさに天地をゆるがし

た。いよいよわれにも命令が下り、三人に一個の背負爆薬が渡され、山麓の散兵壕で待機していた。どこからともなく轟音とともに飛来する砲弾の炸裂する様は、死を覚悟の心境のもともでも不気味なものであった。

終戦と武装解除

八月十五日の終戦は、戦線のわれわれには全く分かっていなかった。ただ戦線が何となく静かになり、おかしいなあと思っていたら誰言うもなく日本が不利な立場で停戦したとの噂が流れたが、信じ難いことであった。数日後、山を下り、ある広場でソ連軍によって武装解除をされて、はじめて敗戦を実感した。同時に、捕虜としてこれから先どうなることか不安と焦燥にかられて夜も眠れなかった。後に六十万の将兵がシベリアで抑留されるとは夢にも思っていなかった。

シベリアへ連行抑留生活

九月半ば頃、定かでないが、掖河の北方で一〇〇〇人単位に部隊編成され、有蓋貨車に詰め込まれて国境綏芬河を通過、一路北上した。出発時には東京ダモイ

とかわれわれの原隊は山梨の甲府とかいろいろな噂が流れていたが、防寒衣の配布があり貨車の北上に伴い僅かな望みも空しく、いよいよ捕虜として抑留されることが決定的となった。この部隊は直接戦闘に参加した者が多く、生きて祖国の土を踏むことはないと思っていたし、今捕虜となつてどんな顔をして肉親に会うことができるというのか、思い悩んだ者も少なくなかつた。監視兵の僅かな隙をみて、一組、また一組と逃亡を企てたが、嚴重な監視下では逃れる術もなかつた。

数日後、ヒロビジャンに到着。この町は第四十六地区收容所の本部であつた。早速半身裸にされて、肉付きのよい元氣そうな者を一級、他は二級に格付されて、一級三〇〇人を選び、後に魔のヒンガンと呼ばれた二分所に送られることになつた。ここは錫鉱開発計画の所と聞いていたが、人跡未踏の地で道路はなく、米国製の八輪大型トラックで河をゴトゴトと上り、岩にぶつかればわれわれが車を下りて排除し、一日をかけて目的地に到着した。

既に十月半ばであり、積雪二〇センチくらいの銀世界、厳しい寒気の中に、二張りの大型天幕に小丸太を組み二段とし、少量の乾草を敷き三〇〇人を收容、ほとんど寝返りもできない状態であつた。中央にドラム缶のストープ二基を備えて暖をとつていた。端々の者は朝方には着のみ着のままの衣類に氷が張りついている有様であつた。缶詰の空缶を利用した油しんで灯をともした。

初め頃の作業は道路建設、收容所建設、木材伐採等で、寒暖計が目盛いっぱいの下四十八度になれば作業中止であつた。いづれも体力の衰えと希望なき人間の本能か、無氣力によつてノルマを大幅に割り、「ダワイダワイ、ブイストラブイストラ」とせぎたてられ、悲憤に堪える毎日であつた。給食は言うに及ばず粗悪少量で、到底労働に堪えられるものではなかつた。後方との運搬が途絶えて一日トウモロコシ十二粒と黒パン一かけらで耐えたこともあつた。野菜類は数カ月皆無であつた。

收容所は、ソ連軍の監視の下で、所内は日本軍の組

織のままに階級によって支配されていた。次第に将校と兵の感情は対立に向かい、不穏な動きも時々起こっていた。このようなことを察知してか、監理はいよいよ厳しくなって私物検査が度々行われ、一切の刃物は没収せられて、入所以来の髪、ひげは伸び放題、みじめな姿であった。二十年の暮れから二十一年夏にかけてのヒンガン二分所の抑留生活は、前述の如く悪環境に加えて給食の粗悪により飢餓地獄絵巻を見るが如く、地獄極楽がこの世に存在するなら、この時期のヒンガン二分所はまさに地獄であった。栄養失調患者が続出して、作業をできない者は貨物なみにトラックに積まれてピロビジャン病院に移送された。後に聞いた話ではその大部分の方が死亡されたようである。二十三年の秋頃帰国の目的でナホトカに移動したとき、入所時の三〇〇人のうち残っていた者は五十人くらいであったと聞いている。この数字は定かではない。二十一年秋頃と思う頃には新しい収容所も完成し、人員も次々と補充されて一〇〇〇人余となっていた。後方の町とトラック通行するようになり、地方人も

続々来て家を構えていた。マガジン、パン工場もでき、ヒンガンの町も錫鉱開発に向かつて次第に活気づいていた。

二十二年を迎えた頃には収容所の処遇も大分改善されて、作業も組毎の競争意識が高まりつつあった。その頃民主運動が本格化して、「大皇帝打倒」をスローガンに階級章撤廃、将校追放、選挙による組織づくりと、大改革を行うことになり、私も民主委員に選ばれて微力ながら努力した。こうして魔のヒンガンと言われていた二分所にも希望と明るさの兆しが蘇ってきた。

復員

二十三年秋、待ち焦がれていた帰国の報にラゲルでは歓声があがった。飢えと寒さ、厳しい労働に堪え、地獄のような思い出も今になっては懐かしい思い出に変わっていった。三カ年の思い出を残し、ヒンガンの人々の歓呼に送られて一路ナホトカに向かった。数日後ナホトカに到着。そのまま帰国の途につくものと思っていいたら、意外にも「日本から船が来ないから

暫く帰国は中止」と伝えられ、空しさが胸にこみあげて涙が出た。早速周辺の收容所に入り、それから約九カ月、港の建設工事でノルマ達成に駆り立てられた。

二十四年七月、漸く待望の帰国者名簿が発表され、私もその一人として永徳丸に乗船、二日後に、二度と踏むことはないと言ったこともあった懐かしい祖国を、舞鶴の平栈橋で帰国の第一歩を踏みしめた。舞鶴での復員業務を終え、一路故郷へ。九日、懐かしいわが家に七年ぶりに帰り着いた。その時の情景は今も臉に映像の如くハッキリと残っている。

復員後

復員後の二十四年十月、同郷の坂本家に養子となり、宮内村役場に奉職（現保内町）。

五十一年、教育長、中央公民館長を最後に二十六年間の勤めを終え、退職後、町議会議員を二期、行政相談委員、町遺族会長等を務め、微力を尽くしたつもりであります。現在は、老体に鞭打って農作業に励みながら、志を果たし得ず酷寒の凍土で眠っている同胞を偲びながら、戦友会、シベリア抑留者の会合や催しに

は万難を排して参加しようと心に決めています。

【執筆者の紹介】

昭和二十年八月二十日 石頭で終戦 歩兵二六六連

隊第三大隊

九月 入ソ ビロビジャン四六収

容所

昭和二十四年七月 復員、帰国

復員後、地方公務員となり、現在、農業

（愛媛県 山本 繁夫）

国際ラーゲルの囚人たち

熊本県 南部 吉正

昭和二十八年十二月一日、やっとの思いで祖国の港町舞鶴の地に上陸した。昭和十五年正月に故郷の村を出て以来十四年ぶりの帰郷であった。

シベリアではずっと、イルクーツク周辺の国際ラー